環的中日本主義の勧め

15.0.24　縮小社会研究会

篠原　孝

1. 篠原の気付いた縮小社会論

(1) 世　界

「来たるべき宇宙船地球号の経済学」(ケネス・ホールデイング)(1966)

「成長の限界」の概念を経済学に導入(ローマクラブ)(1972)

「Small is beautiful」(人間復興の経済)(フリードリッヒ・シューマッハー)(1973)

「沈黙の春」(ルイチェル・カーソン)(1974)

「ソフト・エネルギー・パス」(エイモリー・ロビンズ)(1979)

「エントロピーの法則」(ジェレミー・リフキン)(1980)

「西暦 2000 年の地球」(アメリカ国務省)(1980)

「「縮み」志向の日本人」(李御寧)(1982)

「貿易は国を滅ぼす」(ラビ・バトラ)(1993)

(2) 日　本

宇沢弘文「自動車の社会的費用」(1974)

室田武　「エネルギーとエントロピーの経済学」(1979)、「原子力の経済学」(1981)、
「水土の経済学」(1982)、「雑木林の経済学」(1985)、
「天動説の経済学」(1988)

小島慶三「人間復興の経済学」(1981)、「江戸の産業ルネッサンス」(1989)、
農業農村3部作

室田泰弘「日本ソフト・パス—エネルギー問題からの試論」(1981)

槌田敦　「石油文明の次は何か」(1981)、「資源物理学入門」(1982)、
「エントロピーとエコロジー」(1986)

玉野井芳郎「生命系のエコノミー」(1982)・・・初代エントロピー学会会長

内橋克人「幻想の「技術一流国」ニッポン」(1982)

糸川英夫「第 3 の道-インドと日本とエントロピー」(1982)、
「人類は21世紀に滅亡する？」(1994)

槌田劭　「破滅にいたる工的くらし」(1983)、「未来へつなぐ農的くらし」(1983)、

「共生の時代—使い捨て時代を超えて」(1981)

広井良典「定常型社会」(2001)、「持続可能な福祉社会」(2006)、

「始まっている未来」(共著 2009)

水野和夫「100 年デフレ」(2003)、「資本主義の終焉と歴史の危機」(2014)

藻谷浩介「デフレの正体」(2010)、「里山資本主義」(2015)

2. 工的非循環社会の終焉

(1) 落日の加工貿易立国体制

①化石燃料(石炭・石油)による地球温暖化、気候を狂わす←環境制約

②鉱物資源の枯渇 ←資源制約

③忍び寄る環境汚染・化学合成物質(環境ホルモン・農薬)の危険、原発放射能

(『原発廃止で世代責任を果たす』(2012))

むしばまれる生命(アトピー性皮膚炎、喘息、発達障害・・・)←自然の治癒力を超える

(2) 自由貿易の落とし穴→市場拡大は望めず

①自由は強者の論理、TPP は国境をなくし地域社会を壊す(『TPPはいらない』(2012)

②中国の脅威、人件費がすべを決める

③ダイエーの消滅からみるユニクロの命運、サービスは何も生産せず

今後は通販中心へ(×宅急便ばかり)

(3) 人間疎外

①単調労働ばかりが増える

②家庭、地域の絆の弱まり、少子高齢化は避けられず

③ひきこもり、いじめ、無縁社会

3. 農的循環社会への道(『農的循環社会への道』(2003))

(1) 真の生産

①太陽エネルギー・光合成・植物

②第 2 次産業も生産にあらず

(2) 日本は資源大国

①リサイクル・再生産・天然資源こそ本来の資源

②1800mmの雨、北緯 35 度、海

③江戸時代から世界一の人口密度

④森林 7 割は天の恵み

(3) 21 世紀は生物系産業の時代(『第一次産業の復活』(1995))

①農業は自然の恵みをいただくもの:環境保全型農業の合理性

②21 世紀は生物学の時代(19 世紀の化学、20 世紀の物理)(ex 大村智ノーベル賞)

③リサイクル自立国家の見本を示す、寄生的国家は長続きせず

(4) 持続的開発(Sustainable Development)

①産業と持続的開発、捕獲漁業が最も原始的で持続的、加工畜産の矛盾(表)

②最大持続生産量(Maximum Sustainable Yield:MSY)、総有権、漁業権

③総量規制の時代

4. 農業にみる縮小社会化

(1) 労働生産性よりも土地生産性重視

(2) 鉱業的農業(資源収穫型農業)よりも環境保全型農業(資源循環型農業)

(3) 大規模単作農業よりも中小規模複合農業

(4) 原産地表示が国内生産を後押し、BSE でトレーサビリティの定着

(5) 安全、新鮮、味が国産回復へ

5. 食の世界にみる縮小社会化(Shorten the distance between farm and table)

(1) スローフード(イタリア):1986 年北部の小さな町ブラ←マクドナルド出店

(2) 身土不二(仏教、韓国):ウリミル運動、農都不二

(3) ジョゼ・ボベの反マクドナルド運動(フランス):反グローバリズムの旗手

cf. 藤田田 元日本マクドナルド社長(12才までに味を覚えさせる)

(4) フードマイル(イギリス):1994 年消費者運動家 ティム・ラング

(5) 菜食主義(全世界):日本に少ないのはなぜか(cf 仏教は殺生嫌うは嘘か?)

(6)地産地消、旬産旬消(Produce Locally、Consume Locally:Produce Seasonally、Consume Seasonally)→自産自消(Produce oneself、Consume oneself)

6. 地産地消のメリット

(1) 農政:地域自給率の向上、不耕作地(耕作放棄地)の有効活用

(2) 消費者:顔の見える範囲、トレーサビリティ(追跡可能性)の確保

(3) 生産者:食べる人の顔が見える励み、高齢者の生きがい、小遣い稼ぎ

(4) 環境:フードマイレージはゼロに近い

(5) 地域経済:地域通貨(エコマネー)などいらず

（6） 地域社会：食が結ぶ連帯感

7. 持続社会（縮小社会）の見本は江戸時代：幕末の来訪者がみた日本

（1） 皆が幸せそう、笑顔 → しかめ面になる

（2） 子どもを大切にする → 育児放棄、児童虐待

（3） あまり働かない → 形式上はワークホリック

（4） お祭り好き → 同じだが、町や村の祭りが存続できず

（5） 街も村もきれい → 同じだが、一昔前はもっときれい。
今は空き家と耕作放棄地だらけ

（6） 金持ちの生活も簡素 → 部屋にモノがあふれる

（7） 余裕があり文化はぜいたく→ 余裕がなくなりケチり始める、経済優先

（8） 何事も器用 → だんだん失しなわれつつある

（9） 犯罪がなく安全 → 同じ

（10）人口が安定（中期以降 3000 万人）→明治以降急激に増え、今は減少期

8. 縮小社会の大原則

（1） 資源はムダ使いしない（→エントロピーを増やさない）

（2） 余計なものは作らない、買わず、使わず、3R+Refuse to make. buy. use
（→経済成長は捨て、ささやかな幸せ）

（3） 最終消費地の近くで必要な物を生産（→現地生産、貿易はなるべく少なく）

9. 環的中日本主義の勧め（表）（『農的小日本主義の勧め』（1985））

（1） 軍事大日本主義（戦前の日本）、破滅に至る

（2） 工的大日本主義（戦後の日本）、長続きせず

（3） 金的大日本主義（金融大国、今のアメリカ）、虚構の繁栄

（4） 環的中日本主義

① 縮小には経済界は拒否反応

② 小日本主義も一般社会には受け入れられず

③ 循環（環的）＋ 分際をわきまえた middle power →環的中日本主義

④ 物の移動はなるべく少なく（Food mileage. Wood mileage. Goods mileage）（表）

第１次産業と持続的開発（Sustainable　Development）

産業				資源(原材料)	供給先	環境負荷	循環度合	21 世紀の永続性	備考
農業	耕種農業	有機農業（環境保全型農業）		生物資源	国内	森林破壊，化学肥料・農薬による水・土壌汚染	循環そのもの	永続	消費者が支持
農業	耕種農業	化学農業	工業的農業	生物資源 鉱物資源	国内 外国	化学肥料・農薬・除草剤等による水・土壌汚染	基本的に循環	低投入型であれば永続可	消費者が離れていく
農業	耕種農業	化学農業	鉱業的農業	生物資源 鉱物資源 水・表土	国内 国内 地下・地表	化石水を鉱物資源のように掘り尽くす 表土を流出	化石水，表土は再生できず	化石水が枯渇し，表土が失われた時に消滅	米・中西部の Center Pivot 農業
農業	畜産業	放牧畜産		生物資源（牧草）	国内	糞尿による牧場の水・土壌汚染	糞尿は牧場に残る	過密放牧をしない限り永続可	豪，NZ，モンゴル
農業	畜産業	加工畜産	日本	生物資源（輸入飼料）	外国	糞尿による国土の水，土壌汚染	糞尿はたまる一方	輸送コストが上がると採算合わず消滅	オランダ，農産物加工貿易立国
農業	畜産業	加工畜産	米国・中西部	生物資源（自給飼料）	国内	糞尿による畑・牧場の水・土壌汚染	糞尿は畑・牧場に還元	輸送コストが上がっても存続可能	
農業	畜産業	加工畜産	英国	生物資源（輸入飼料） 生物資源（牧草、肉骨粉）	外国 国内	糞尿による畑・牧場の水・土壌汚染	糞尿は畑・牧場に還元	草地畜産に戻らないと消滅	狂牛病の発生
工業（例：石油化学工業）				鉱物資源（石油）	外国	あらゆる公害 （大気・水・土壌・海洋汚染）	非循環型大量生産・大量消費・大量廃棄	Co_2 の規制により縮小し、石油の枯渇により消滅	米石油会社は種会社を買収して次の仕事を探す
漁業	捕獲漁業	遠洋漁業		生物資源	外国 （主として公海）	国際的な乱獲競争	資源枯渇の危険	乱獲がなければ永続	近代的狩猟採取
漁業	捕獲漁業	沿岸漁業		生物資源	国内 （200 海里内）	乱獲の誘惑	資源枯渇の危険	乱獲がなければ永続	原始的狩猟採取
漁業	養殖業	給餌養殖漁業		生物資源（輸入魚粉）	外国	面：残餌や排泄物による海洋汚染	非循環	輸送コストが上がると採算合わず消滅	日本の加工畜産と同じ
漁業	養殖業	給餌養殖漁業		生物資源（低級魚：鰯）	国内	面：残餌や排泄物による海洋汚染	ほぼ循環	輸送コストが上がっても存続可能、鰯の魚価高騰で消滅	米・中西部の加工畜産と同じ
漁業	養殖業	無給餌養殖漁業		生物資源	国内	面：排泄物による海洋汚染	基本的に循環	過密養殖をしない限り永続可	中国の草を餌とする養殖はより循環的
漁業	栽培漁業（放牧漁業）			生物資源	国内・外国	単一種の放流により生態系を乱し，生物多様性に害	人工的循環	生態系を破壊しなければ永続可	資源量の増大 植林と同じだが間伐いらず
林業（植林）				生物資源	国内	単一種の植林により生態系を乱す(地域は限定) Co_2 の吸収	基本的に循環	天然林を残すことで永続可	間伐が必要 天然林の伐採は捕獲漁業と同じ

環的中日本主義の勧め　（工的大日本主義の矛盾を考える）

	明治～戦前	戦後～現在	21世紀
大国の性格	軍事大国	経済大国	大国主義の放棄（生物資源大国、援助大国）
日本の方針	富国強兵・殖産興業 → 自立的超大国	加工貿易立国 → 寄生的通商国家	permaculture 立国 → 自立的循環国家
進出	領土拡張・植民地化 ＝ 軍事進出 タカ派 ＝ 軍部	工業製品市場の拡大・原料供給地化 ＝ 経済進出 タカ派 ＝ 高度経済成長論者	なし（内在する生物資源、伝統的技術と市場を生かし、海外依存を脱却）
大義名分	東亜新秩序の形成 アジアの欧米列強支配からの解放 → 結果的に実現	なし（働いて豊かになってどこが悪いという開き直り） → 理念なき特殊な国家	地球社会の共存共栄 → 北 国際的社会福祉 → 南 国際的に尊敬される理想国家
競争原理 ‖ 強者の論理	軍事拡大競争 （ワシントン条約等の国際的歯止め）	経済拡大競争 ＝ 自由貿易の原則 （国際的歯止めなし、各国が輸入制限・高関税・自主規制等）	利己的な国家間競争はなし （相手国の立場をわきまえ、慎ましやかに振る舞う）
先進国との関係	植民地支配をめぐり衝突 → 日本の孤立、国際連盟脱退 → 第２次世界大戦へ	慢性的通商摩擦の発生 → 日本の再孤立化 → 経済戦争	率先して人間重視・自然調和型の新しい生き方の見本を示す
発展途上国との関係	領土支配 → 敗戦による他律的解消 （→ 経済復興に専念）	経済支配 → 南北格差・南北摩擦の拡大 → 反日感情の再燃	農業・中小企業・人づくり等により自立の手助け → スウェーデン的中進国
発展途上国の目標	民族独立 → 戦後の民族独立戦争でLDC（後発開発途上国）側がすべて勝利	民族の経済的自立 → 資源ナショナリズム（丸太輸出禁止、産油国精製）	民族の文化的自立 → 南北があらゆる面で対等になることをめざす
先進国の評価	帝国主義 植民地主義	エコノミック・アニマルという反感	（やっと国際社会の一員となったと好意的評価）
発展途上国の評価	同上	経済帝国主義・経済植民地主義という批判	（新国際経済秩序に見合うという好意的評価）
日本国内の評価	同上	ジャパン・アズ・ナンバーワンとうぬぼれる	（浮き世離れした超理想主義的空論と一笑？）
食料	拡大した植民地で生産し国（植民地）内自給	国際分業論により海外からの輸入に全面的に依存	国内の資源をフル活用し自給率を高める
エネルギー	アメリカが石油の輸出を禁止したため、中国・東南アジアで自ら油田開発	国内炭等を捨て全面的に海外からの石油に依存 原発等代替エネルギーの開発	国内資源（森林、小水力、太陽熱、風力、地熱）の有効活用 省資源・省エネルギー
防衛	欧米列強に伍すため、ひたすら軍事力を拡大 → 軍事衝突そして戦争へ	輸出しやすい環境を維持するためにその範囲で拡大 → 防衛予算の突出 → ？	最低限の防衛に徹する 経済・技術協力による国際世論の支持が最良の安全保障
教育	国家のために滅私奉公する強い軍人あるいは国民の育成	個人の利益のためによく働く産業人の育成（滅公奉私？） → 教育の荒廃（いじめ、登校拒否等）	人間としての基本的素養を身につけた国際的にも通用する日本人の育成
大国主義中日本主義 小日本主義	大国主義 植民地拡大 軍備拡大 大東亜共栄圏の建設	石橋湛山の小日本主義 海外植民地放棄 軍縮 民族独立援助	環的中日本主義 海外資源・市場放棄 総合安全保障 民族自立援助

資料1

フード・マイレージ、ウッド・マイレージ、グッズ・マイレージ

13.3.26.環境委員会

篠原　孝

1. フード・マイレージ： Food Mileage （t･km）

- 篠原が地産地消（食べ物は、その場でできたのをその場で食べるのがベスト）を1987年より使用
- イギリスのTim Lamgが Food Milesとして1994年から提唱
- 篠原（農林水産政策研究所長時代）が2001年5月朝日新聞「視点」で地産地消を定量的に示す概念として初めて使用。中田哲也研究員が各国比較等の計算をする。
- 食べ物は、その時できたのをその時食べるのがベスト（旬産旬消）
- Produce Locally, Consume Locally : Produce Seasonally, Consume Seasonally で国際的に認知される。

2. ウッド・マイレージ： Wood Mileage （t･km）

- 木の地産地消を定量的に示す
  （川越市の一戸建て住宅に秩父材を使うかカナダ材を使うかで輸送に伴うＣＯ2排出量が５倍差

3. グッズ・マイレージ： Goods Mileage （t･km）

- 物の輸送はなるべく少なくする
  （⇔　自由貿易、国際分業論）
- 長野県のような内陸部には、軽薄短小の工業しか採算合わず、重化学工業は臨海型しか存立しえず
- 輸送コストを考えたら、最終消費地の近くで最終製品にするのも合理的　⇒　自動車も徐々に海外現地生産にシフト